

女歌における嫉妬の表現

—『万葉集』磐姫歌群を始発として—

Expressions of Jealousy in *Onna-uta* —Beginning with Iwanohime Anthology—

中西 洋子

Yoko NAKANISHI

キーワード：和歌、相聞歌、女歌、嫉妬、物語

Key Words : Waka, sounmonka, Onna-uta, jealousy, narratives

はじめに

『古事記』『日本書紀』（以下記紀）、及び『万葉集』に登場する仁徳天皇の皇后磐姫（いはのひめ・石之日売命・磐之媛命）は上代文学の中でも優れて個性的、魅力的な輝きを放っている女性である。記紀には、〈色好み〉に余念のない仁徳天皇の相手の女性に対し、激しい嫉妬の感情をむき出しにして、ことごとく拒絶しようとした物語が歌謡を伴いながら展開されている。一方、万葉集（巻二）では一途に夫を慕いその帰宅を待ちわびる、抒情ゆたかな相聞歌四首を伝えており、たおやかな美しい心ばえの女性として印象づけられているのである。つまり、記紀から受ける磐姫像と万葉集の歌群から受

ける印象とでは、かなりの相違が認められることはあきらかであり、上代文学における問題点の一つとしてしばしば論じられてきている。本稿ではこの両者のずれに関して、恋愛感情を伴った女性の男性に対する〈嫉妬〉の感情が相聞の歌として表現される時、どのような変容をみせるのか。相聞歌の、とりわけ〈女歌〉の有り様とその制約ともいべき力について考えてみようとするものである。

一

磐姫に関する記載は嫉妬の部分も含めて記紀では多少異なる。ここではその嫉妬がどのようなものであるのか、嫉妬を語る箇所を左

記のように掲げた（傍線は筆者）。
古事記

(1) 大后石之日売命、甚多く嫉妬みたまひき。故、天皇の使はせる妾は、宮の中に得臨かず、言立てば、足母阿賀迦迹嫉妬みたまひき。

(2) 天皇、吉備の海部直の女、名は黒日売、其の容姿端正しと聞き看して、喚上げて使ひたまひき。然るに其の大后の妬みを畏みて、本つ国に逃げ下りき。

(3) 大后豊樂したまはむと為て、御綱柏を採りに、木国に幸行でましし間に、天皇、八田の若郎女と婚ひしたまひき。(中略) 是に大后大く恨み怒りまして、其の御船に載せし御綱柏は、悉に海に投げ棄てたまひき。

日本書紀

(4) 十六年「朕、是の婦女を愛まむと欲れども、皇后の妬みますに苦りて、合すこと能はずして、多年経ぬ。何ぞ徒に其の盛年を妨げむや」

(5) 二十二年天皇、皇后に語りて曰はく、「八田皇女を納れて將に妃とせむ」とのたまふ。時に皇后聴さず。

(6) 同年皇后、遂に聴さじと謂して、故、黙して亦答言したまはず。

(7) 三十年時に皇后、難波濟に到りて、天皇、八田皇女を合しつと聞きしめて、大きに恨みたまふ。則ち其の採れる御綱葉を海に投れて、著岸りたまはず。(略) 爰に天皇、皇后の忿りて著

岸りたまはぬことを知しめさず。(略) 皇后、還りたまはずして猶行でます。

(8) 三十五年皇后磐之媛命、筒城宮に薨りましぬ。

右は古事記および日本書紀についてそれぞれ通し番号で記した。従って両者が対応する記載とそうでないものを含んでいる。この中で、磐姫を語る時必ず引用されるのは(1)の「甚多く嫉妬みたまひき」という、その特徴を大きくとらえた記述である。またその様子については「言立てば、足母阿賀迦迹嫉妬みたまひき」と、實際の動作を伴った非常にリアルな描き方がされている。天皇に仕える女性達は宮殿の中に入っていくことが出来ず、また少しでも普段と違った特別なことをすると、足をバタバタさせて嫉妬したというのである。激しいことも激しいが、まるで聞き分けのない子どものような仕草だ。(4)以下では、こうした具体的で生き生きとした記述はみられない。また(2)では、宮廷に召された吉備の黒日売が「大后の妬みを畏みて、」故郷に逃げ帰ったが、その船出を惜しんで歌った天皇の歌(歌謡番号52)を聞き、「大く忿りまして：追い下ろして、歩より追い去りたまひき」と伝える。皇后の嫉妬に恐れをなす話は(4)にも見えており、その嫉妬のために長年召し入れることなく過ぎたので、桑田玖賀媛を播磨速待に与えた、とある。

さらに、(3)では八田若郎女に対する嫉妬を語るもので、日本書紀の(5)、(6)、(7)がこれに当たる。豊樂のための御綱柏を採りに紀の国に出かけた留守に、天皇が八田若郎女と婚ひしたことを聞いた磐姫が「大く恨み怒りまし」て「御船に載せし御綱柏は、悉

に海に投げ棄てたまひき」と記す。ここでも激しい嫉妬の様子が描写されている。(7)にも同様の部分が見えるが、「悉に」と強調した副詞句はない。(5)、(6)では(3)に先行する話として、八田皇女を妃とする相談を天皇から受けていたが、いずれも「皇后 聴さず」「遂に聴さじ」、あるいは「黙して亦答言したまはず」とかたくなに拒絶の態度を示している。またその後、宮廷に帰らず山城の宮に入ってしまった皇后を連れ戻そうとする天皇との、歌のやり取りがおこなわれるのは(3)、(7)ともに共通するが、山城をついに離れることなく、筒城宮で薨じたと(8)には伝える。記ではこれに触れず、次につづく雌鳥王の物語の中で、豊樂の主権者として登場している点が異なっている²⁾。

以上、記紀に伝える磐姫の嫉妬の箇所についてみてきたが、この問題に関して次のような考えを述べたことがある。すなわち、大国主命の後である須勢理毘売の嫉妬にもみられるように、神代から伝わる嫉妬する女人像を、その怒りの所作が巫女の神懸かりの際の表現であること、またそれが岩石信仰と密接に関わること、さらに葛城氏の系譜にみられる石を名乗る人々や信仰に関する伝承などを経て、同氏の地盤である葛城、その山々の信仰と変遷などを辿ることにより、磐姫を葛城山の信仰に根ざした祭祀を司る、葛城家最高の巫女、呪的能力のゆたかな女人としてとらえようとした。つまり、その〈嫉妬〉は葛城家の巫性豊かな女人としての、その祭祀力を固守しようとする意志のあらわれであり、その行為は自らの呪力を發揮することであった、というものである³⁾。

同じ問題に関連しては、この〈嫉妬〉を威力の発動という観点からとらえた考察がある。それは、(1)に掲げた「言立て」の意味するところと同様、威力のある言葉により発動されたもの、つまりそれは、〈嫉妬〉に呪的威力を感じさせる表現である、とする内容である。さらにまた、古事記の嫉妬には公的、呪的要素を窺わせる質があり、書紀の場合は男と女の関係において解釈できるものとして、記紀における嫉妬の質に言及している点も注目される⁴⁾。

また次のような論もある。〈嫉妬〉をめぐる仁徳と磐姫の物語を、神代の大国主命と須勢理毘売の神話を規範としたものであるとし、仁徳が神代にこの全国土を初めて統括する神として君臨した大国主命と重層しているのと同様、磐姫も嫉妬の女神須勢理毘売と重層し、神話的意味を負うよう構造化されている、というものである。そして、その嫉妬は国土に新しい秩序と安寧をもたらす天皇と皇后の強力な和合を生み出すものであり、その意味では呪的な力だとしているのである⁵⁾。

さらに、「言立て」に関連して、記における磐姫の嫉妬を、先に触れたと同様「言」の呪力としてとらえ、仁徳紀にみる磐姫像の特質を仁徳の〈公〉〈理〉に対する〈私〉〈情〉とその体現であるとする論も加えておきたい⁶⁾。

以上、先に示した拙稿と重なる部分を含みながら、それ以外の新しい見方を紹介した。いずれも磐姫の〈嫉妬〉には始原的で強力な呪性が共通して認められることを、ここでは確認するにとどめた。

二

こうした記紀の伝えに対して、万葉集では仁徳天皇を慕って詠んだという題詞をもつ次の歌群を伝える。

磐姫皇后、天皇を思ひたてまつる御作歌四首

85 君が行き日長くなりぬ山たづね迎へか行かむ待ちにか待たむ

右の二首の歌は、山上憶良臣の類聚歌林に載す。

86 かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根し枕きて死なましも
のを

87 ありつつも君をば待たむ打ち靡くわが黒髪に霜の置くまでに

88 秋の田の穂の上に霧らふ朝霞何処辺の方にわが恋ひ止まむ

或る本の歌に曰はく

89 居明かして君をば待たむぬばたまのわが黒髪に霜はふれども

右一首、古歌集の中に出づ。

(万葉集巻2)

巻第二、相間の部立の巻頭に据えられたこの歌群は、仁徳朝当時の歌ではなく磐姫を主人公とした歌物語における伝承歌であろうという点、四首は起承転結の構成をもつことなど、今日ではすでに定説とされている。また、その成立の過程については諸説があるが、短歌形式の個人の抒情歌の成立は斉明朝頃からとみなされており、磐姫歌群の成立もこれに従うものである。

「あなたが旅立たれてからも何日も経ってしまいました。山路を尋ねて迎えに行きましようか。それともこのまま待ち続けましようか。―それにしても、こんなに恋い焦がれて苦しんでいるくらいなら、いつそ高山の岩を枕にして死んでしまっほうがよほどましで

す。―いいえ、やはりこうしてあなたが再び私のところに戻られるのを待ちましよう。この長い黒髪に霜が置くようになるまでも。―秋の田の稲穂を一面に覆って動かぬ朝霞―私の恋の苦しみが晴れる方は一体どちらにあるのでしょうか。消えることも忘れることかなわぬこの心よ。」

四首の現代語訳を右のように示してみた。四首ともにそれぞれ独詠歌であり、独立した歌とも見えながら、内容と言葉のもつリズムや緊張感が互いに緊密にひびき合って一つの抒情世界を生み出した、見事な構成である。85の「山たづね」とは、死者や重病人の魂を求めて、仮死の状態にあると考えられている人の身体に連れ戻そうとする民俗であり、挽歌の表現として万葉集に定着した言葉である。ここではその発想を取り入れることで、居ても立ってもいられない思いが「迎へか行かむ」以下を呼びだし、「迎える」と「待つ」との繰り返しによって逡巡する思いが強調される。86でも下句、「高山の岩根し枕きて死なましもを」にみるような、挽歌的発想に根ざした、死を願うほどのつきつめた思いの烈しさを歌う。

次の87では下句、「打ち靡くわが黒髪に霜の置くまでに」のようにどのように待つのか、「待つ」状態が具体化されている。「黒髪に霜が置く」とは、美しい黒髪が老いて白髪になる意味と、黒髪に夜の霜が降りる意味と二通りの解釈があり、時間的な長さの問題とされている。ここでは前者の意味としたい。つまり、それほど長く待とうというのである。ただし、異伝89のように「居明かして」ならば、一夜を寝ないで外で明かすことであるから、後者となる。88は前三

首の思いをも含めた恋の歎きとして総括される。上句の美しい自然描写は、実景そのものというより、それを活かした序詞と見ておきたい。鬱屈した思いが、稲穂を覆っている朝霞の描写となったもので、同時にそれは作者の心象風景であり、下句の嘆きの心と支えあひびきあって、序詞の効果を上げているのである。

以上一首ごとの表現の特徴を簡単に述べてきたが、その検討はすでに試みたことがある。⁹⁾ また、この歌群に関する先行の諸論については、随時採り上げていくことにしたい。

つまり、こうした歌群から窺われるのは、遠い旅先にある夫への一途な思慕と、ひたすら帰りを待ちつつ、待つことに苦しみ煩悶する一人の女性の歎息である。また、返歌をもたない、女の側からの一首また一首とたたみかけていくような思慕と懊悩の抒情世界は、読み手の胸に側々と迫るものがある。その思いは嬾々としていながらしかし、意外に烈しく到いものであることにも気づかされるのである。

〈待つ〉と〈恋ふ〉とが交互に詠み込まれているのも効果的である。しかし、これがたとえ仮託であり伝誦歌であるとしても、ここにみられる磐姫像は記紀から受ける印象とはまるで異なっている。また、この歌群を構成する歌が、物語の地の文とともに存在したものであったのか否か不明であるが、両者の間には明らかに差異が認められよう。このずれをどのように考えればよいだろうか。

三

磐姫とこの歌群との結びつきについては、卷二の編纂意図に関連して早く折口信夫に意見がある。¹⁰⁾ それは、卷二の巻頭に磐姫の歌を収めたのは、卷一の巻頭が雄略天皇の御製で始まるのと同様、どちらも激しく憤る魂を鎮める必要があったからだ、というものである。一方、臣下出身である藤原光明子の立后の際、それを有利に進めようとする政治的状況の中で、記紀の磐姫像の転換をはかり、貞淑なイメージを形成するために、この歌群が編成されたとする見方もある。¹¹⁾ あるいはまた、万葉の時代になって儒教的な帝王観が定着するに従い、磐姫皇后も天皇を深く慕う理想的な皇后として傳承されるようになったのだからともいわれる。¹²⁾

さらに、成立時期と構成の問題に関連して次のような考察もある。それは、第二原形本を想定するとともに、磐姫が「古き世の恋の代表者」とされ、仁徳朝が「人の世の始まり」と観ぜられて、そうした人の歌を規範として冒頭に飾ることにより、白鳳宮廷ロマンス歌集ともいべき卷二相聞の盛容を備えようとした、というものである。¹³⁾

右に紹介した諸説は、いずれも万葉集卷二の編纂意図や構成とその過程、成立年代などに関わつての論である。記紀の伝承との関わりとそのイメージの違いについてはどうであろうか。まず、記紀の伝えとその違いを指摘した上で、「仁徳紀の意図が儒教的理念に基づく望ましからざる后像の形象であった」のに対して、記では「一夫多妻の時代に抗して、夫を独占して生きたいと願う女性の立場を

擁護する立場で描くもの」であるとする。そして、これと万葉歌群から受ける磐姫像との関わりについて、「仁徳の身の上を案じながら、あるいは自らの思いに反むく他の女性との関係を心配しながら、迎えにいこうか待っていかうかと逡巡する磐姫の心が歌われ、優しさを全面に出した歌となっているが、その優しさの裏に嫉妬深さ、夫を独占的に自分のもとに繋ぎ止めておこうとする思いが潜んでいる」と結論づける論である。¹⁴

つまり、嫉妬とひたすらな愛は一人の内に同居し得るものとする観点から、記紀と万葉集とは一人の人物の分ち難い二面をそれぞれ別の面からとえたものとする意見である。これは非常に魅力的な見方であるが、ここには記紀と万葉集における磐姫像を、どうしても一致させようとする姿勢がうかがえるように思う。それは、地の文である物語、伝承などの散文と、定型である歌とを同レベルに置いて理解しようとするこの問題かもしれない。しかし記紀の歌謡と磐姫歌群については、形式は異なるが一連の歌であると認める説は、この点を繋ぐヒントとして極めて重要だと思われる。¹⁵

拙稿ではしかし、以上のような諸説の確認とそれを視野に入れながら、別の観点からこの問題を考えてみたい。結論から言えば、磐姫像の記紀と万葉集における印象のずれは、歌という定型そのものに原因があるのではなからうか、ということである。とりわけここでは、相聞歌にみる女歌の特徴としてとらえてみたい。万葉集には次のような激しい嫉妬の歌がみえる。

さし焼かむ 小屋の醜屋に かき棄てむ 破薦を敷きて うち

折れむ 醜の醜手を さし交へて 寝らむ君ゆゑ あかねさす
晝はしみにらに ぬばたまの 夜はすがらに この床の ひし
と鳴るまで 嘆きつるかも

(巻13・三二七〇 作者未詳)

反歌

わが情焼くもわれなり愛しきやし君に恋ふるもわが心から

(同 三二七二)

右は女の歌で、恋する男が他の女と寝ている場面を想像して歌ったものである。二人が逢っている小屋を焼いてしまいたい、敷いている薦を棄ててしまいたい、女と抱きあっているあの手をへし折ってやりたいと、感情をむき出しにした言葉がならぶ。現代人にも充分理解できる感情である。この歌について『万葉百歌』では、こうした激しい嫉妬の歌は万葉集にもそれ以降にもみられないと指摘し、また、その激しさは反歌によって自分の気持ちなどをなだめる鎮魂の歌になっていて、歌を詠むのはこういう鎮魂の働きを期待する場合が多くあると述べている。¹⁶一方これを受けて、富岡多恵子の言説を示しながら、詩歌の言葉はことばの美に向かうこと、嫉妬やのろいというものも、悲しみとか怨みなどという情緒的なものにならないと歌にはならない、と歌のもつ宿命的な性格に言及した意見も提示されている。こうした見方は本論を進める上で非常に示唆的である。¹⁷

つぎねふや 山代河を 河上り 我が上れば ……葉広 五百
個真椿 其が花の 照り坐し 其が葉の 広り坐すは 大君ろ
かも

右は天皇が八田若郎女と婚したことを聞き伝えた磐姫が、山城に上る時に歌った歌謡（記57）である。しかし、「大く恨み怒りまして」と、地の文にあるような嫉妬や恨みの言葉は一語もみえず、それのみか天皇に奉った歌の内容は相手を讃え寿ぐ寿歌⁽¹⁸⁾に変貌している。

この寿歌に関して、寿詞や寿歌を献する立場は、主君に対する臣下であり、天皇への寿詞はそれに服属する豪族たちの献するものであるところから、皇后や采女などの寿歌献上者を男のそれと比較した場合、主従の関係と同時に男女の関係ともなること。そしてそれは思慕や恋情の表現に近づく可能性を持つ。とする論があり、⁽¹⁹⁾短歌的抒情への橋渡しの要素をこうした歌謡からうかがうことが出来るのである。

さかのぼって、「甚く嫉妬^{うはなりねみし}」た須勢理毘売が大国主命に返した歌謡（記5）にも、「……汝こそは 男に坐せば ……若草の妻持たせらめ 吾はもよ 女にしあれば 汝を除きて 男は無し 汝を除きて 夫は無し……」と歌われる。あなたには余所に多くの妻がいるでしょうけれど、女の私にはあなた以外に夫はいないので、軽い恨みを含みつつ、あくまでも相手へのかわらぬ恋慕の情を切々と歌う。こうした地の文とのずれも、右に紹介したごとく歌のもつ性格に照らしてみれば、その兆しがすでに見受けられる。つまり形式こそ異なりはするが、少なくとも女の側の歌という点においてはその共通性を認めることができるだろう。

磐姫歌群から受ける磐姫像も、この視点からおのずと見えてくる

ものがあるように思う。いかに嫉妬に身を焦がし苦しんでいようとも、歌という定型に表現するとき、その内面がそのまま如実に生の言葉であらわされるのではない。いつの間にか激しく滾るような思いはすり抜けて、ひたすら相手を恋い慕い、逢えぬ辛さ、待つ寂しさを歎息かきいとして、変貌した姿でたちあらわれる。先に触れた、他に類例を見ないという嫉妬の歌について述べている点も含めて、それは五音、七音の韻律と形式をもった歌という、いわば定型が定型であるための力―規制する―によるものであろうと考えられる。とりわけそれは後述するように、相聞歌における女歌に顕著にみられるのではないだろうか。

四

ところで女の嫉妬における地の文と歌とのずれは、平安朝の物語の世界にも継承されている（傍線筆者）。

うらなくも思ひけるかな契りしを松より波は越えじものぞと
おいらかなるものから、ただかすめたまへるを、いとあはれに
うち置きがたく見たまひて、（略）
（源氏物語・明石）

右は正妻の立場にある紫の上が、明石の君に通う光源氏に対して嫉妬する場面で、源氏の「しほしほとまづぞ泣かるるかりそめのみるめは海人のすさびなれども」に返した歌である。地の文では、穏やかならずあてこすつていらつしやる、とある。そのわりに紫の上の返歌は、心変わりはいらないとあなたを信じきっていたのにと、地の文に添いつつ怨みとして歌われながら、強く突っぱねる激しさは

みられない。

思ふどちなびく方にはあらずともわれぞ煙にさきだちなまし

(同・滯標)

同じく明石の君の件で「ただならず思ひつづけたまひて」と、穏やかならぬ恨めしい気持ちを述べる箇所や、源氏の言葉として「さすがに執念きところつきて、もの怨じしたまへるが…」と紫の上の執念深い嫉妬心を語る場面がある。しかし歌では、思い合った同士が同じ方向になびくという、その方角ではないにしても、私はその煙に先立って死んでしまったらよかったのかしら、と嘆く歌に変貌しているのである。煙に先だつて死んでしまいたいとは、磐姫歌群に共通する恋の嘆きである。嘆きに変換しなければ歌としては収めようがなかった。地の文と歌とのずれがここでは明確である。

舟とむるをちかた人のなくはこそ明日かへりこむ夫と待ちみめ

(同・薄雲)

源氏がめかしこんで明石の君を訪問しようとしているのを、紫の上が嫉妬する場面で、地の文では「女君ただならず見たてまつりたまふ」とある。歌は明石の君から引き取って育てている幼い姫君に、源氏がかけた「明日帰り来む」の言葉を受けたもので、あなたを引きとめるをちかたの人(明石の君)がいないのでしたら、その言葉通り、明日お帰りになる夫とお待ちしてもみるでしょうけれど、(ちゃんと明石の君がいるのですから、明日帰るなんてまるで当てになりませんわ)と、しんねりと待つ側の怨みとして歌われる。ここでは催馬楽「桜人」を踏まえての趣向に、贈答歌のおもしろさ

が存分に發揮されている。しかし、どのような修辭上の技巧がほどこされても、基本的には閨の怨みに繋がる〈待つ女〉の領域を一步も出てはいない。女の歌はどのように歌わなければならなかったのである。

源氏物語において、光源氏が理想の男性として描かれるように、紫の上も理想の女性として描かれている。その理想生活とは古代から受け継がれている〈色好み〉にあったが、それは各地の優れた女性との結婚によってその国の国魂を身につけ、支配権を得ることに本来の意味があった。大国主命や仁徳天皇にみるごとくである。これが平安朝の宮廷を中心としたみやびの生活に継承されたのが、光源氏の物語であった。対して嫉妬の炎を燃やすのが理想の女性であり、光源氏の色好みに生涯苦悩するヒロインとして描かれたのが紫の上だったのである。

ここでは、こうした伝統が物語の地の文と歌とのずれの上にも継承されていることを指摘しておきたい。

五

万葉集の相聞歌(贈答、問答も含めて)は、歌垣(かがひ)にみるような時と場所を定めて行われてきた、男女の歌のかけあいにその発生が求められる。男の歌いかけに素直に応じることは男の意のままになることであったから、女の歌はなびくとみせてはぐらかし、切り返し、あるいは擲揄し、なじり、怨みなどをもって歌い返すのが常套であった。この伝統が女の歌に底流し、一夫多妻の婚姻形態

とともに次第に内面化され、男を待つことの嘆きや怨みに分け入ってその心理をさまざまに歌うようになっていく。女歌はその中から生まれた言葉である。

〈女歌〉とは周知のように折口信夫の語彙であるが、今日ではすでに學術用語とみなされている⁽²¹⁾。それは、歌の発生から近代短歌までを見通そうとする文学史的構想に立った中でとらえたもので、恋歌(相聞歌)を基盤とした女性の歌の伝統と本質、その内容や表現における変容などを、時代を追いながら追求したものである。従って、単純に作者が女性であるという意味からの用語ではない⁽²²⁾。

そこで、先に掲げた磐姫の相聞歌四首について今少し考察を加えておきたい。たとえば二首目86では、「高山の磐根し枕きて死なましものを」と挽歌的発想による表現を用いていると先に述べた。一見大げさとも思えるが、この「死なましものを」とこれに類する用語例を万葉集中にみとみると、「死ぬべきものを」「死ぬべく思へば」「死なまくのみぞ」「死なむよわが背(吾妹)」「死なば安けむ」など、その数は類歌を含めると33例に及ぶ。

何せむに命継ぎけむ吾妹子に恋ひざる前に死なましものを
(巻11・二三七七)

いつまでに生かむ命そおほるかに恋ひつつあらずは死なむ勝
れり
(巻12・二九一三)

吾妹子に恋ひつつあらずは刈薦の思ひ乱れて死ぬべきものを
(巻11・二七六四)

今は吾は死なむよわが背生けりともわれに寄るべしと言ふと

いはなく (巻4・六八四 大伴坂上郎女)

なかなか死なば安けむ君が目を見ず久ならば為方なるべし
(巻17・三九三四 平群女郎)

右に掲げたのはその数首であるが、全体の中で相聞および相聞的発想ではないと判断されるもの5例を除くと、28例が巻四、巻十一、巻十二、巻十三所収であり、ほとんどが相聞、相聞往來の歌で占められている点に注目したい。「死」を伴ったこれらの用語がいかに恋の歌と深く結びついているかがよく理解できるだろう。加えて、「恋ひ死なむ」「恋ひ死なば」などの用例を合わせると、その数はさらに増す。それは強調および誇張表現として類型化され、定着をみたものであった。そして古今集以降の恋歌におびただしく用いられるように、常套句として継承されていくのである。

誇張表現は三首目87についてもみられる。下旬「わが黒髪に霜の置くまでに」を先に触れたように、異伝歌89「居明かして」に従うのでなく、艶やかな黒髪が老いて白髪となるまでも、と理解した。

「霜」は喩である。つまり、それほど途方もない年月を待ち続けようという意味であり、ここにも強調と誇張の表現が指摘できるのである。なお、類型句については四首目88の「わが恋ひ止まむ」にもみられる。この用語例は、

大船のたゆたふ海に碇下し如何にせばかもわが恋止まむ
(巻11・二七三八)

直に逢ひて見てばのみこそたまきはる命に向ふわが恋止まめ
(巻4・六七八 中臣女郎)

ひさかたの天つみ空に照る月の失せなむ日こそわが恋止まめ

(卷12・三〇〇四)

山萬やまちきの白露しげみうらぶるる心も深くわが恋止やまず

(卷11・二四六九)

などのように万葉集に十二例(二例は重複)あり、絶えることのない恋心の苦しみの表現として常套的に使われているものであった。88の場合は上句「秋の田の穂の上に霧らふ朝霞」の、実景を活かした序詞と相俟って、一連をしめくくるにふさわしい、美しく整った相聞歌となっている。

つまり、以上のような点に相聞歌の伝統を示す特徴の一つが指摘されるのであり、その使用は次第に多く女性の側に委ねられていくことになる。それは古今集以降の贈答歌、独詠歌、あるいは歌合わせなどの機会や場を通して、恋の内面が複雑化されるとともに、語彙も増え、その表現のレトリックも高度な発達を遂げていく次第はあらためて述べるまでもない。特に独詠の恋歌においてそれは顕著であった。

玉の緒よ絶えなばたえねながらへば忍ぶることのよほりもぞず
る

(新古今卷11・恋歌一)

式子内親王の右の一首は、けだしその頂点をなすものである。ここには磐姫の「死なましものを」に通じる、忍ぶ恋の苦しさで激しさが感じられる。レトリックや語彙が増え、どのように内面が深まろうとも、あるいは恋することが現実であろうがなかろうが、歌の形に表現しようとする場合、その伝統は確実に継承され、そこか

ら逸脱することはない。そのように歌う約束なのであり、女歌という歌の力がそうさせているからである。その力は反面において、歌の束縛であり、また限界であるとも換言できるだろう。

以上、記紀の伝承と万葉集の磐姫歌群から受ける印象とのずれを、嫉妬の表現を通して考えてみようとした。磐姫歌群に相聞歌における女歌の初期の姿を認め、その力の働きがずれを生み出すことになつたのではないか、という試論である。

【注】

- (1) 曾倉岑「イワノヒメの嫉妬」『古事記・日本書紀Ⅱ』(日本文学研究資料叢書 有精堂 昭60)には記紀を対照させ、嫉妬物語を詳査している。
- (2) 都倉義孝「石之日売の嫉妬物語を読む―歌と物語の交渉―」『古事記の歌』(古事記大系9 古事記学会編 高科書店 平6)では皇后の帰還は語られないが和解によつてその状態になった、とする。
- (3) 中西洋子(林田)「女人と氏族伝承―磐姫皇后(一)―」(六)『歌誌』『人』第38号 人短歌会 昭52)
- (4) 青木周平「古事記研究―歌と神話の文学的表現―」第二(歌謡と説話篇)(おうふう 平6)
- (5) (2)に同じ
- (6) 牧野正文「言立」と嫉妬―仁徳紀におけるイハノヒメ像の一性格―『古事記年報』42(古事記学会 平12)
- (7) 稲岡耕二「磐姫皇后歌群の新しさ」(『東京大学教養学部人文科学科紀要』60 昭50)氏はこれに関して「山多都祢」は、帰りの遅い夫を山の中に尋ね求めるといふ、文字通り「迎へ」に行く状態の説明として受け取り、86ではこれを受けて、迎へにいったと逢えるとは限らない。山中に徘徊し遂には高山の岩を枕に死ぬようなことになるかも

知れぬ。というのがこの歌の真意だとする。また同氏は、折口信夫のいう、死者の魂を連れ戻す、〈魂ごい〉が「やまたづね」であり、「高山の岩根しまきて」とともに挽歌的発想の歌であること、これが恋の歌である相聞歌にも用いられたとする説を否定している。

なお、磐姫歌群の研究史と問題点については、「磐姫皇后の歌」〔万葉集を学ぶ 第二集〕有斐閣 昭52)で従来諸説の整理と、自身の見解が示されている。

- (8) 寺川真知夫「磐姫皇后の相聞歌」『セミナー万葉の歌人と作品第一巻 初期万葉の歌人たち』(和泉書院 平11)でも前者をとる。
- (9) 中西洋子「方法への再出発」(歌誌『人』第134号 昭60)
- (10) 「上代貴族生活の展開」昭和8年(『折口信夫全集』第9巻所収 中央公論社 昭43)
- (11) 直木孝次郎「磐姫皇后と光明皇后」『夜の船出』(塙書房 昭60)
- (12) 森朝男『万葉集百歌』(古橋信孝共著 青灯社 平20)
- (13) 伊藤博『万葉集の構造と成立上』「巻二磐姫皇后歌の場合」(塙書房 昭49)
- (14) (7) に同じ
- (15) 中西進「伝誦の作家たち」『中西進万葉論集第一巻』(講談社 平7)
- (16) 古橋信孝『万葉集百歌』(森朝男共著 青灯社 平20)
- (17) (12) に同じ
- (18) 土橋寛『古代歌謡全注釈 古事記編』(角川書店 昭51)
- (19) 森朝男「磐之媛嫉妬物語の歌」(『記紀歌謡』古代の文学Ⅰ 早稲田大学出版部 昭51)
- (20) 「源氏物語における男女両主人公」『折口信夫全集』第8巻所収(中央公論社 昭30)
- (21) 女歌に関する諸説を整理、解説したものに佐野あつ子『女歌の研究』(おうふう 平21)がある。
- (22) 「額田王」『折口信夫全集』第9巻所収・「女流短歌史」同第11巻・「女流の歌を閉塞したもの」同第27巻など(中央公論社 昭43)

※引用は『日本古典文学大系』(岩波書店)。漢字は当用漢字。

Abstract

While Iwanohime, Empress of Emperor Nintoku is narrated in Kojiki and Nihonshoki as a woman of strong jealousy, she is on the contrary a devoted wife longing for her husband's return in Man'yōshū. The author, with this discrepancy between the narratives and soumon-ka (love poems) sheds a special light on waka, especially onna-uta which turns jealousy into soumon (love) lyricism, with its modes and limitations, by studying the expressions of jealousy.